

【 復活讃詞 主日第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
天 在 者 樂 地 在 者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
悦 主 其 臂 力 顯

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復
死 以 死 滅

くかつのはじめとなあり、われらをぢごく
活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくうい、せかいにおおいな
腹 救 世 界 大

るあわれみをたまいたればなり。
憐 賜

【 聖世祖主日アポリティキオン 第2調 】

しのかんかりよくはおおいなるかあな、み
信 感 化 力 大 哉 三

たりのしょうしゃはほのおのいづみのなかにあ
少 者 焔 泉 中 在

りて、あんそくのみづにおけるがごとくよ喜
安 息 水 於 如 喜

ろこべえり、よげんしゃダニイルもししを
預 言 者 獅

ひつじのごとくぼくするものとしてあらわれ
 羊 如 牧 者 顯

たあり。ハリストスカみよ、かれらの
 神 彼 等

きとうによってわれらのたましいをすくいた給
 祈 禱 因 我 等 靈 救 給

ま あ え 。

【 新年のアポリティキオン 第2調 】

こうえいはちちとこ と せいしんにきい
 光 榮 父 子 聖 神 歸

す、

ときとしとおのれのけんないにおきたま
 時 歳 己 權 内 置 給

いしばんぶつのぞうせいしゅうよ、なんぢの
 萬 物 造 成 主 爾

おんたくをもつてとしにこうむらあせ、
 恩 澤 以 年 冠

しょうしんぢよのきとうによりて、われらをへ平
 生 神 女 祈 禱 因 我 等

いあんにまもりてすくいたま あ え。
安 守 救 給

【 聖世祖主日のコンダック 第6調 】

いまもいつうもよよに、アミン。
今 何 時 う も よ よ に、ア ミ ン。

みえにふくたるものはてのしるしたるかたち
三 重 福 者 は て の し る し た る か た ち 像

をうやまわらずして、しるされぬしんせいにな
敬 記 神 性

ようごせられて、ひのげきじょうにえいを
擁 護 火 劇 場 榮

えたあり。かれらはたえがたきほのお
獲 彼 等 は た え が た き ほ の お 焰

のなかにたちて、かみをよべえり、
中 立 神 呼

ああかんゆうのしゅよ、いそげ、じれんなるに
鳴 呼 寛 宥 主 よ い そ げ、じ れ ん な る に 慈 憐

よりてすみやかにわれらをたすけた給
因 速 我 等 助 給

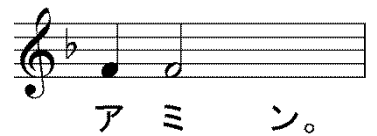
まえ、なんぢはほつするところよくせざる
爾 欲 所 能



な あ し 。

司祭) (黙誦： ^{せい} 聖なる ^{かみ} 神、 ^{せいじゃ} 聖者の中に ^{うち} 息い、 ^{せいさん} セラフィムより ^{こえ} 聖三の ^{もつ} 聲を以て ^{かしよう} 歌頌せられ、
 ヘルヴィムより ^{さんえい} 讚榮せられ、 ^{ことごと} 悉くの ^{てんぐん} 天軍より ^{ふくはい} 伏拝せられ、 ^{ばんぶつ} 萬物を ^む 無より ^{ゆう} 有と
 なし、 ^{ひと} 人を ^{なんぢ} 爾の ^{ぞう} 像と ^{しょう} 肖とに ^よ 依りて ^{つく} 造り、 ^{なんぢ} 爾が ^{もろもろ} 諸の ^{たまもの} 賜を以て ^{もつ} 之を ^{かざ} 飾り、
^{ねが} 願う者に ^{もの} 智慧と ^{ちえ} 明悟とを ^{めいご} 與え、 ^{あた} 罪を行 ^{つみ} う者を ^{おこな} 棄てずして、 ^{もの} 其 ^す 救の ^{そのすくい} 爲に ^{ため} 痛悔
 を ^た 立て、 ^{われらいや} 我等卑しくして ^{ふとう} 不當なる ^{なんぢ} 爾の ^{しょぼく} 諸僕を、 ^こ 此の ^{とき} 時に ^{おい} 於ても、 ^{なんぢ} 爾が ^{せい} 聖な
 る ^{さいだん} 祭壇の ^{こうえい} 光榮の ^{まえ} 前に ^た 立ちて、 ^{なんぢ} 爾に ^{とうぜん} 當然の ^{ふくはいさんえい} 伏拝讚榮を ^{たてまつ} 奉るに ^た 堪うる ^{もの} 者と
 なしし ^{しゅさい} 主宰よ、 ^{なんぢみづか} 爾親ら ^{われら} 我等 ^{ざいにん} 罪人の ^{くち} 口よりも ^{せいさん} 聖三の ^{うた} 歌を受け、 ^{なんぢ} 爾の ^{じんじ} 仁慈を
^{もつ} 以て ^{われら} 我等に ^{のぞ} 臨み、 ^{われら} 我等に ^{およ} 凡そ ^{じゆう} 自由と ^{じゆう} 自由ならざる ^{つみ} 罪を ^{ゆる} 赦し、 ^わ 我が ^{たましい} 靈と ^{からだ} 體と
 を ^{せい} 聖にし、 ^{われら} 我等に ^{しょうがいぜんこう} 生涯善功を以て ^{もつ} 爾に ^{なんぢ} 務むるを ^{つと} 得せしめ ^え 給え、 ^{たま} 聖なる
^{しょうしんぢよ} 生神女と ^{こせい} 古世より ^{なんぢ} 爾の ^{よろこび} 喜を ^な 爲しし ^{しょせいじん} 諸聖人と ^{きとう} の ^よ 祈禱に ^よ 依りてなり、)

司祭) ^{けだしわ} 蓋 ^{かみ} 我が ^{なんぢ} 神よ、 ^{せい} 爾は ^{われら} 聖なり、 ^{こうえい} 我等光榮を ^{なんぢちち} 爾父と ^こ 子と ^{せいしん} 聖神に ^{けん} 献ず、 ^{いま} 今も ^{いつ} 何時も ^{よよ} 世世
 に、



ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光 榮 父 子 聖 神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等 憐
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 聖世祖の主日 第4調 及び新年の 第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅわ} 主^{せんぞ} 我^{かみ} が先祖の神よ、^{なんぢ} 爾^{さんよう} は讚揚せられ、^{なんぢ} 爾^な の名は^{よよ} 世々に^{さんびさんえい} 讚美讚榮せらる、

しゅわがせんぞのかみよ、なんぢはさんようせ
主我先祖神 爾 讚揚
られ、なんぢの名はよよにさんびさんえいせえ
爾 名 世 世 讚 美 讚 榮
らる。

誦經) ^{けだしなんぢ} 蓋^{およ} 爾^{われら} は凡^{おこな} そ我^{こと} 等^{おい} に行^ぎ いし事に於て義なり、

しゅわがせんぞのかみよ、なんぢはさんようせ
主我先祖神 爾 讚揚
られ、なんぢの名はよよにさんびさんえいせえ
爾 名 世 世 讚 美 讚 榮
らる。

誦經) ^わ 吾^{しゅ} が主^{おおい} は大^{そのちから} なり、^{またおおい} 其^{そのちえ} 力^{はか} も亦^{がた} 大^{がた} なり、^{がた} 其^{がた} 智慧^{がた} は測^{がた} り難^{がた} し、

わがしゅはおおいなり、そのちからもまたおお
吾主大 其力亦大
いなり、そのちえははかりが難
其 智 慧 は 測 り 難



【 使徒經 (アポストロス) 328 端 エウレイ書 11 章 9~10、17~23、32~40 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、信によりてアヴラアムは許約の地に在りて、己に屬せざる地に於けるが如く、

イサク及びイアコフ、即同一の許約を同じく嗣ぐ者と偕に幕に居りたり、蓋彼は

基ある城、神の營み造る者を俟てり。信に由りてアヴラアムは試みられて、イサク

を獻げたり、許約を受けし者にして、其獨生子を獻げたり、即爾の裔はイサクに

由りて稱えられんと、言われし所の者なり。蓋彼意えり、神は亦死より復活せしむる

を能すと。故に之を預象として受けたり。信に由りてイサクは將來の事を指して、イ

アコフ及びイサフを祝福せり。信に由りてイアコフは死なんとする時、イオシフの二子を

祝福し、且其杖の上に拜せり。信に由りてイオシフは終らんとする時、イズライリの諸

子の出でん事を憶わしめ、且己の骸骨の事を遺命せり。信に由りてモイセイは生れし後、

三月間其父母に匿されたり、蓋彼等は子の美しきを見て、王の命を畏れざりき。我

復何をか言わん、若しゲデオン、ヴァラク、サンプソン、イエツファイ、ダヴィド、サムイル、及

び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。彼等は信に由りて諸國を従え、義

を行い、許約を受け、獅の口を箝ぎ、火の勢を滅し、劍の刃を避け、弱きよりして

強くせられ、戦に勇み、異邦の軍を潰せり、婦は其死者を復活せし者として受け

たり、亦或者は更に善き復活を得ん爲に、免るるを欲せずして、酷く戮されたり、他の

者は嘲弄と鞭扑と、又縲紲と圜圜との試を受け、石にて撃たれ、鋸にて解かれ、拷

もん あ やいば ころ めんよう さんよう かわ き るろう きゅうぼう かんなん しん
 間に遇わせられ、刃にて殺され、綿羊と山羊との皮を衣て流離し、窮乏、患難、辛
 く しの せかい お た もの こうや さんれい がんけつ ちくつ さまよ これらみなしん
 苦を忍び、世界に置くに堪えざる者は、曠野、山嶺、巖穴、地窟に徨えり、此等皆信
 よ しょう きょやく ところ え けだしかみ われら こと おい さら
 に由りて證せられたれども、許約せられし所を獲ざりき、蓋神は我等の事に於て更に
 よ こと よけん かれら われら とも まつた え ため
 善き事を預見せり、彼等は我等と偕にせずしては全きを得ざらん爲なり。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である。信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえて渡されたわけである。信仰によって、イサクは、きたるべきことについて、ヤコブとエサウとを祝福した。信仰によって、ヤコブは死のまぎわに、ヨセフの子らをひとりひとり祝福し、そしてそのつえのかしらによりかかって礼拝した。信仰によって、ヨセフはその臨終に、イスラエルの子らの出て行くことを思い、自分の骨のことについてさしずした。信仰によって、モーセの生れたとき、両親は、三か月のあいだ彼を隠した。それは、彼らが子供のうるわしいのを見たからである。彼らはまた、王の命令をも恐れなかった。このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよひ続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。

【 使徒經 (ティモフェイ前書 2 章 1~6 節) 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがティモフェイに達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 子ティモフェイよ、我凡の事に先だちて勧む、衆人の爲、帝王、及び凡そ權を操
 る者の爲に、祈禱、祈願、懇求、感謝を爲さんことを、我等が凡の敬虔と聖潔とを

もつ へいあん おんせい いのち わた ため けだしこ われら きゅうしゅかみ まえ ぜん
以て平安にし、穩靜なる生を度らん爲なり、蓋此れ我等の救主神の前に善にし

い こと かれ しゅうじん すくい え およ しんじつ し いた ほつ けだし
て納れらるる事なり、彼は衆人が救を得、及び眞實を知るに至らんことを欲す。蓋

かみ いつ かみ ひと あいだ ちゅうほしゃ またいつ すなわちひと
神は一なり、神と人との間には中保者も亦一なり、乃人ハリストス イイス、

しゅうじん ため おのれ あた もの かれ そんけい こうえい よよ き
衆人の爲に己を與えし者なり。彼に尊敬と光榮とは世世に歸す、アミン。

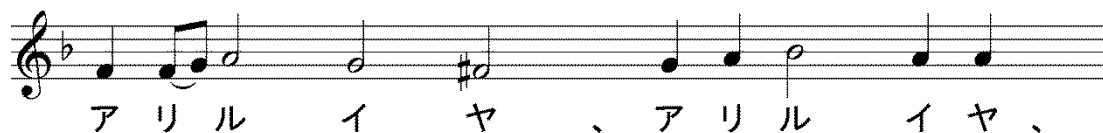
(比較用 口語訳)わたしの子テモテよ、まず第一に勧める。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、感謝とをささげなさい。それはわたしたちが、安らかで静かな一生を、真に信心深くまた謹厳に過ごすためである。これは、わたしたちの救主である神のみまえに良いことであり、また、みこころにかなうことである。神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。彼は、すべての人のあがないとしてご自身をささげられたが、それは、定められた時になされたあかしのほかならない。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

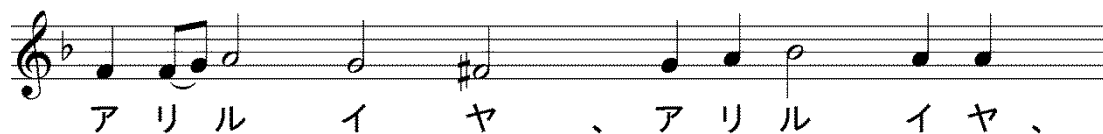
誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) ^{かみ われら おのれ みみ き われつそ なんぢ おこな こと われら の} 神よ、我等は己の耳にて聞けり、我が列祖は爾が行いし事を我等に述べたり、



誦經) ^{かみ ほめうた おい なんぢ ぞく} 神よ、讚頌はシオンに於て爾に屬す、



司祭) (黙誦：^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ}人を愛する主 宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が
^{しねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく}思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる
^{いましめ おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ}誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜
^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし}ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス
^{かみ なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせい}神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖
^{しぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書1端 1章1~25節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き こ ぞくふ} 謹みて聴くべし、ダヴィドの子、アヴラアムの子、イイススハリストスの族譜。アヴラアム
^{う う およ そのけいてい う} はイサクを生み、イサクはイアコフを生み、イアコフはイウダ及び其兄弟を生み、イウダ

はファマリに^よ因りてファレス^{およ}及^うびザラを生み、ファレスはエスロム^うを生み、エスロムはアラム^うを生み、アラムはアミナダフ^うを生み、アミナダフはナアツソン^うを生み、ナアツソンはサルモン^うを生み、サルモンはラハヴ^よに因りてヴォオズ^うを生み、ヴォオズはルフィ^よに因りてオヴィド^うを生み、オヴィドはイエッセイ^うを生み、イエッセイはダヴィド^{おう}王^うを生み、ダヴィド^{おう}王^うはウリヤの妻^{つま}に^よ因りてソロモン^うを生み、ソロモンはロヴァアム^うを生み、ロヴァアムはアヴィヤ^うを生み、アヴィヤはアサ^うを生み、アサはイオサファト^うを生み、イオサファトはイオラム^うを生み、イオラムはオ ज्या^うを生み、オ ज्याはイオアフアム^うを生み、イオアフアムはアハズ^うを生み、アハズはエゼキヤ^うを生み、エゼキヤはマナッシヤ^うを生み、マナッシヤはアモン^うを生み、アモンはイオシヤ^うを生み、イオシヤはイオアキム^うを生み、イオアキムは、ヴァヴィロン^うに^う徙^{まえ}さる^う前^う、イエホニヤ^{およ}及^うび其^お兄^う弟^うを生み、ヴァヴィロン^うに^う徙^うされし^{のち}後^う、イエホニヤはサラフィイリ^うを生み、サラフィイリはゾロヴァヴェリ^うを生み、ゾロヴァヴェリはアヴィウド^うを生み、アヴィウドはエリアキム^うを生み、エリアキムはアゾル^うを生み、アゾルはサドク^うを生み、サドクはアヒム^うを生み、アヒムはエリウド^うを生み、エリウドはエレアザル^うを生み、エレアザルはマトファン^うを生み、マトファンはイアコフ^うを生み、イアコフはイオシフ^うを生めり、^{すなわち}即^おマリヤの^お夫^{とな}なり、マリヤよりハリストス^うと^う稱^かうる^{ごと}イイスス^よは^う生^うれたり。是^うく^よの^よ如^よく^よ世^よを^よ歴^よること、^ふアヴラアム^うより^うダヴィド^{いた}に^う至^{じゅうよだい}る^うまで^う十^う四^う代^う、^うダヴィド^うより^うヴァヴィロン^うに^う徙^うさる^うに^う至^{いた}る^うまで^{またじゅうよだい}亦^う十^う四^う代^う、^うヴァヴィロン^うに^う徙^うされし^うより^うハリストス^{いた}に^う至^{またじゅうよだい}る^うまで^う又^う十^う四^う代^うなり。イイスス^うハリストス^うの^う生^うまる^うこと^う左^うの^う如^うし、^う其^う母^うマリヤ^う、^うイオシフ^うに^う聘^うせられて、^う未^うだ^う婚^うせざる^う先^うに、^う聖^う神^うに^う由^うりて^う孕^うめる^うこと^う見^うれたり。その^う夫^うイオシフ^うは^う義^う人^うにして、^う之^うを^う顯^うに^うせん^うこと^うを^う欲^うせず、^う私^うに^う彼^うを^う離^うさん^うこと^うを^う望^うめり。然^うれども^う此^うの^う事^うを^う思^うえる^う時^う、^う視^うよ、^う主^うの^う使^う夢^うに^う彼^うに^う現^うれて^う曰^うえり、^うダヴィド^うの^う子^うイオシフ^うよ、^う爾^うの^う妻^うマリヤ^うを^う納^うる^うこと^うを^う懼^うる^う勿^うれ、^う蓋^う其^う内^うに^う孕^うまれし^う者^うは^う聖^う神^うに^う由^うる^うなり、^う彼^うは^う子^うを生^うまん、^う爾^う其^う名^うを^うイイスス^うと^う名^うづけん、^う彼^う其^う民^うを^う其^う罪^うより^う救^うわんと^うすれば^うなり。凡^うそ^う此^うの^う事^うの^う成^うりし^うは、

しゅ よげんしゃ も い ところ かな いた いわ み どうぢよはら こ う そのな
 主が預言者を以て言いし所に應うを致す、曰く、視よ、童女孕みて子を生まん、其名は
 エムヌイルと稱えられん、譯すれば神我等と偕にするなり。イオシフ 寐より起きて、主の
 つかい かれ めい ごと おこな そのつま い ただいま しつ おな そのちようし
 使の彼に命ぜし如く行い、其妻を納れたり。惟未だ室を同じくせざるに、其冢子
 う およ すなわちそのな な
 を生むに迨べり、則其名をイイスと名づけたり。

(比較用 口語訳) アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父、ユダはタマルによるパレスとザラとの父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、アラムはアミナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父、オベデはエッサイの父、エッサイはダビデ王の父であった。ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父であり、ソロモンはレハベアムの父、レハベアムはアビヤの父、アビヤはアサの父、アサはヨサパテの父、ヨサパテはヨラムの父、ヨラムはウジヤの父、ウジヤはヨタムの父、ヨタムはアハズの父、アハズはヒゼキヤの父、ヒゼキヤはマナセの父、マナセはアモンの父、アモンはヨシヤの父、ヨシヤはバビロンへ移されたころ、エコニヤとその兄弟たちとの父となった。バビロンへ移されたのち、エコニヤはサラテルの父となった。サラテルはゾロバベルの父、ゾロバベルはアビウデの父、アビウデはエリヤキムの父、エリヤキムはアゾルの父、アゾルはサドクの父、サドクはアキムの父、アキムはエリウデの父、エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマタンの父、マタンはヤコブの父、ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。だから、アブラハムからダビデまでの代は合わせて十四代、ダビデからバビロンへ移されるまでは十四代、そして、バビロンへ移されてからキリストまでは十四代である。イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず、ひそかに離縁しよう決心した。彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。すべてこれらのことが起ったのは、主が預言者によって言われたことの成就するためである。すなわち、「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリヤを妻に迎えた。しかし、子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった。そして、その子をイエスと名づけた。

司祭) 彼の時イイス其養育せられし所のナザレトに來り、安息の日に、其常例に依りて、
 かいどう い よ ほつ た よげんしゃ しよ かれ あた かれ しよ ひら
 會堂に入り、讀まんと欲して立てり。預言者イサイヤの書を彼に與うるあり。彼は書を披
 きて、左に録せる所を出せり、云わく、主の神我に在り、蓋彼は我に膏して、貧し
 き者に福音せしめ、我を遣して、心の傷める者を醫し、擄者に釈を、瞽者に見るこ
 となを傳え、壓せらるる者に自由を與え、主の禧年を傳えしめたりと。乃書を掩

えきしゃ あた ざ かいどう あ ものみなかれ め そそ かれの はじ い こ
 い、役者に與えて座せしに、会堂に在る者皆彼に目を注げり。彼宣べ始めて曰えり、此の
 なんぢら き ところ しょ いまかな しゅうみなこれ しょう かつそのくち い おんちよう
 爾等が聴きし所の書は今應えり。衆皆之を證し、且其口より出づる恩寵の
 ことば き
 言を奇とせり。

(比較用 口語訳) それからイエスはお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。そこでイエスは、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめられた。すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て来るめぐみの言葉に感嘆した。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金ロイオアン聖体礼儀) へ